

彙報

建興五年在銘朝鮮佛像光背の發見

昨年黑板文・學博士は朝鮮半島旅行の際忠清北道忠州に於て金銅製の佛像光背の表に兩脇土等を鑄出し、裏面に「建興五年歲在丙辰弟子清信女上部□尅造釋迦文像願生生世世□開法一功衆生□願」の銘を陰刻せし高四寸、幅二寸六分計の物が在留内地人の手にある事を發見し、之を朝鮮總督府の有に歸せしめられたりといふ。稀世の遺物が官庫に入りて永久保存せらるゝに至りしは慶すべきなり。

右について黑板博士は本年一月考古學會及史學會の講演に於て此光背が六朝の様式及氣分を有するものなること、上部は百濟特有の稱なること等より此光背を百濟人の作とし、建興を百濟の年號とし、其五年丙辰は宣化天皇二年若くは推古天皇二年に當ると斷定せられたり。考古學雜誌の記事によれば右黑板博士講演の席上關野工學博士は「天武紀及天智紀には高麗人にも上部なる文字を冠して居るから上部丈では百濟といふことは出來ぬが如何」と質問されしに對して、黑板博士は「なる程天智天武時代になつて高麗にも現はれ居るのであるが、當時は既に百濟滅亡の後でもあ

り、且つ高麗人云ふも日本に來たものは或は事實百濟人であつたかも知れぬ、これは史學會で多少論じて置いた云々」と答辯せられたりといふ。

余は此記事を読みて黑板博士の説特に其關野博士に對せし答辯に於て大なる疑惑を懷き、是れ恐くは考古學會記者の聽き誤まりなるべしと思考し、更に史學會の講演を知らんと欲して、史學雜誌二月號の到着を待ち、其一月例會記事を見るに、博士の「文化史上に於ける我國と百濟との關係」と題せる講演の梗概を載たるも「上部」といふ稱に就きては其百濟特有なることを斷言せられしのみにて、何等の論證なかりしに失望せり。

右光背は新羅加羅には上部の稱なきを以て之を製作せしは高句麗百濟の二國中其孰かならざるべからず。從て建興の年號は二國孰れかの建元せしものなるべし。其忠州在留人の所有せりこの一事も極めて薄弱ながら地理上より其製作地を推定するの一參考ともならざるにはあらざるべし。「上部」の語に對する關野博士の質問は實に吾人が講演記事を読みつゝありし際黑板博士に問はんと欲せしものなり。百濟に上部の稱ありしことは吾人もさより異議なきを以て之を略し、次に高句麗に於ても上部の語ありしことを示さんとする。

高句麗滅後、於て天智天武の朝に來朝せし高麗人は新羅文武王

が國西の金馬渚に高句麗王族安勝を封じて建設せし高麗王國の使節にして百濟人の詐稱せしものにあらず。黑板博士が之を指して「事實百濟人であつたかも知れぬ」といはるゝは新羅建設の高麗王國の存在を想起せられざりしに因らざるか。尙ほ高麗に上部の稱あるは日本紀卷八延暦十八年十二月信濃國に住せし高麗人の後孫の上表文にも新撰姓氏錄左京諸蕃下豊原連の條にも明證あり。三國史記高句麗紀東川王二十年の條に下部劉屋旬なる人名あり。是れ既に那珂白鳥兩博士が證論されしが如く、下部は上部に對するものなるが故に、此語より推すも上部の稱の存在せしことを認めざるべからず。

上記の光背は百濟人の作か高句麗人の作か凡ての方面より見るも判別し難し。従て建興の年號も右二國孰れの建元に係るや不明なり。これ上部の稱が高句麗にも存在せしことは専門學者の偏く知る所にして今更ら新しく説明するまでの事なれども、其百濟特有説が黑板博士の如き知名の學者によりて唱説さるゝに成ては世俗或は惑ふ者なきにしもあらざらんかと、該佛像光背の發見を紹介する序に聊か卑見を陳べし所以なり。〔今西〕

古墳の發掘と埋藏物の處分に

關する請願

本邦各地に散在せる古墳墓は上代文化の貴重なる記念物にして

第一卷 彙報 古墳掘と埋藏物の處分に關する請願

が研究は本邦考古學の大半を占むるものとして、多くの學者の手に調査攷究せられつゝあるは今更こゝに事新しくいふ迄もなき事ながら、之が發掘及び埋藏物處分に關する現行法が學術上より視て何れも不完全なる結果、各地に密掘行はれ祖先の墳墓は破壊され、埋藏物は散佚して充分なる學術上の調査を遂ぐべき機を逸せしむる事多きは、吾人が各地を踏査するに際し常に遭遇する所にして、研究上、風教上切に遺憾とせし所、現行法に改定を加へて如上の弊害を匡正せん事は識者の均しく認めし所なり。然るに從來此の方面に多大の注意をなしつゝありし大阪毎日新聞社長本山彦一氏は二月一日「古墳の發掘と埋藏物處分に關する請願」を貴衆兩院に提出して、現行の古墳發掘法が理由なく其の所有者を拘束し、埋藏物の處分に就ても、發見者が遺失物法の適用を受くるを法理上不當なりと云ひ、此の法令より生ずる

(一)發掘物を所有するものも、其發掘の場所を秘密にし地理年代等の關係を明にせず。

(二)密掘なるが故に、多くは夜間匆々の間に發掘して、墳墓に對する適當なる敬意を表せしむる餘裕なく。

(三)埋藏物を巨細漏らさず採取し、或は埋藏物の位置排列等に就きて精細なる記録を公表することも出來ず。

等の弊害を敷へ、現行法令を改正して、發掘は一に所有者の隨意

第二號 一七九 (三六九)

と發掘物も亦私人の所有に歸屬せしめんことを請願し、兩院の採擇するところとなれり。

蓋し如何に此の法令が改定せらるべきかは多くの考究を要する問題にして發掘を一に所有者の隨意とする如きは現在以上の惡結果を來すものとて吾人の與する能はざる所なれども、其の改定の必要が識者の輿論たる以上、氏の如き有力者に依りて兩院に提唱せられ朝野の注意を惹きしを喜ぶものなり。吾人は學界の爲めに氏の勞を謝すると共に、當局が切に思をこゝに潛め、適當なる法令を制定して、是等の發掘物に向つて保存の途を講ずると共に之が學術的調査に便せられ以て我が考古學上に光明を與へん事を望まざるを得ず。

海流調査事業

海流調査研究の必要なるは、今更いふまでもなきことにて、我國に於ては從來海軍省水路部農商務省水産局等に於て之を行ひ、標識瓶投入法を採れる事も前後數回其範圍は殆ど我沿海に偏く、漸次調査の歩武を進めれば其結果海流の狀態も次第に明かならんこと。然れども從來標識瓶投入法は其規模大ならざりしかば、我近海に於ける海流調査上遺憾なきにあらざりき。是に於て和田理學博士は先年標識瓶投入法に依りて日本環海々流を研究せられ

其結果は朝鮮總督府大正三年度日用便覽、地學雜誌、大阪毎日新聞日曜附録等によりて發表せられたり。

又大阪毎日新聞社は大正二年一萬餘本の標識瓶を我近海に投入して海流調査の事に着手したりしが、該瓶漂着報告は漸次到來したるを以て和田博士等によりて、整理研究せられ、其の概要は同博士の筆に依り、瓶のゆくへと題して本年一月大阪毎日、東京日日兩新聞紙上に發表せられたりしが、更に二月上旬、瓶のゆくへ(一)として其後の報告に基き、又先に論及せれざりし東部投入瓶の結果をも説明せられたり。其結果を概観するに、日本海流の本流につきては、從來と大差なれども、沖繩群島の西方に於て分歧せらる一支流は、東海に北上して、更に一支流を出して、對島水道に入り、一支流は、黄海の東部に北上して渤海に入り、支那東岸を南下し、臺灣海峡に至りて、日本海流本流に合し、爰に逆轉循環海流を完成す。る事を知るを得たり。日本海に於ける海流につきては、先に同博士の發表せられし所と大差なきも、日本海流の東側、小笠原群島以西には、沖繩群島より臺灣に背進する逆流ありて呂宋島の東方より赤道附近にまで達するもの、如しといふは甚だ注目すべき事とす。之を要するに、其調査はもとより梗概に過ぎざる雖、學界に貢獻する所は甚大なりといはざるべからず、學術的研究は一朝一夕にして成るにあらず。海流調査の如き

殊に然りとす。されば大阪毎日新聞社長本山彦一氏は二月一日「日本海環海々流の研究を以て國家の事業として實行せられたる旨」の請願を貴衆兩議院に提出せられしか幸に其通過を見たるは國家の爲學界の爲慶賀すべき事に、吾人は又本山社長の盡力を多とし、其實現の日の速ならんことを望むものなり。

史學研究會

例會 大正五年三月十九日午後一時より文科大學陳列館特別講義室に於て開催、左の講演あり、出席者、原、内藤、内田、坂口、三浦の諸博士以下會員數十名にして午後五時閉會す。

御用金の米價の調節

法學士 本庄榮治郎君

御用金、献金、及び租税の三者は其性質、や、類似せるも、これが相違點は、其負擔の物體、標準及び徴收の權限、性質、時期等に存す。御用金は其性質として特定の階級即ち當時の金權を掌握せる人々に對して初めて課せ得べきものにして、商人階級が巨萬の富を抱く事は當時に於ては社會組織を亂す恐れありと思推せられしなり、而して「米價調節策としての御用金の位置」を考ふるに徳川時代に於て米は財政の根本にして米價變動の影響は特に武士階級に甚しかりしかば幕府は種々の方法を講じて米價調節を策し御用金は其資金たりしなり。此の米價調節策としての事例を見るに寶曆十一年米價の下落を防止せんため大阪商人に課したるが如

きは一時的効果ありしも却つて市況不良、賣米賣出等の事情錯綜して米價は再び下落するに至れり。又文化十年の用金令の如きも幕府の調節策に於ては其効なく却つて金融の逼迫となれり。かくて幕府が諸侯に對して命じたる大阪表への廻米半減又は制限も米價の調節に切なく其他堂島故老の言に従ひて爾後御用金の上納すべき分を銀主に預る事とし金融緩和を企てしも、亦効力著しからず、遂に其後相續く凶年のために米價は漸次引立つに至りしなりされば「米價調節策としての御用金の効果」は、要するに御用金其自身にては何等の意義なく其の利用によりて始めて一個の作用をなすものなり。故に米價調節策としての御用金は何等かの事實と結合して始めて其効果を表すべきなり。されば用金令は米價調節策の一方法たれども其實際上の効果は、財界の事情、用金額の多少、用金利用方法に俟たざるべからざるものなり云々。

第十七世紀に於ける英佛同盟及英國侵入計劃に就て

文學士 長 壽吉君

第一「英國政策の理想」一六五一年ウカルセスター戰役以來英王チャールス二世は亡命して、佛、西兩國の援助により再び英國に入らんことを企てつゝありし時、英國共和政府に於てクロムエルの勢力侮るべからず、彼等の政策は其外交と言はず内治と言はず一の理想とも言ふべきものありて皆こゝに淵源す。一は宗教上の問題に

して英共和政府は熱烈なる新教信者にして且新教保護者を以て任じたりき。二は物質上の問題にして當時の先進國たる西蘭兩國が其富有なる財源を殖民地に得るを以て英國又殖民政策を立て西印度に於ける優越權を獲得せんと務めしなり。第二「英西同盟及英佛同盟」英西兩國は殖民地の争のため感情面白からず、加ふるに一六五五年英公使マツシヨ氏が西國首府に於て暗殺されし事件あり。又一六五二年英國はカネー占領を目的として英西同盟を提言し、西に拒絶されし事あり。然るに佛國は英國の膨脹を嫌ひ、一六五二年英國と合同して、ダンキルク攻略を提言し、而かも、マザランの巧妙なる態度は、英國に一歩を先んじ、其頃の英國は、或は西國によらんか、或は佛國と結ばんかに迷ひし時なりき。一六五四年西國の提言ありて、兩國間に同盟の交渉始りしが、英國の要求の餘りに過大なりしを以て成らず。クロムエルの果斷なる直ちに西國と戦ふ事とせり。其時、佛國はダンキルク攻撃を再び申出し、英國と同盟せんとせり。蓋しダンキルクは英國侵入計畫を策せる前、英王チャールス二世等の根據地たればなり。是に於て英佛兩國は宗教上の事件に關して二三交渉を重ね終に一六五五年十月廿四日ウエストミンスターに同盟條約を結び、英國は其前日を以て西國に宣戦せり。第三「英國侵入計畫及シンダー、コンムの暗殺計畫」英佛同盟の結果、チャールスは、佛國を逐はれて

西國政府と握手し、共同して英國に侵入し、本國の内應者と共に事を擧げんとし、シンダーコムなるものクロムエルを暗殺せんとして果さず、英政府は愈々ダンキルク攻撃を執行す。第四「英佛同盟」ウエストミンスター條約は成立したれども、ガウシキルク攻撃は佛國の好まざる所なり。英國が大陸上に根據地を占むる事となればなり、然れども終に英國に促されて共同攻撃を開始し一六五八年六月廿五日之を占領し、爲めに英國侵入計畫は水泡に歸したれども間もなくクロムエル死して折角の占領も餘り効果を現はさざりき。此際特にクロムエルとマザランとの性行比較は興味ある問題なるべし云々。

讀 史 會

例會 一月廿六日午後六時より學生集會場にて例會を開く。出席者は三浦教授、今西助教、喜田、西田兩講師、清原、魚澄、中村の諸學士及び今村、松野、辰馬、古田、牧の諸君にして十時過散會せり。當夜の講演の大要左の如し。

二宮尊徳とその一元論

今村孝三君

世人に知られたる二宮尊徳は修身齊家の道を講じ、治國安民の法を説き、至誠を以て本とし、勤勞を以て主となし、分度を立てて體となし、推譲を以て用とせる所謂報德教の創始者なり。而して宣傳者は經濟上に關係を有する一部の人士か、或は日露の戦後

那家百年の長計を樹つるの秋に際せる當時の爲政者が、乃至自家糊口の爲めに翁を利用せる人々なりき。されば三尺の童子なほ二宮金次郎の名を知ると雖ども、徒に聲のみ大にして其實の伴はざる憾あり。翁に關する百餘の著書は概れ通俗平易なる道德經濟に限られ、二三學者の所説を除きては一ととして權威を有するものなきが如し。然れども吾人翁の遺著を精査考究すればその根柢には哲學的思想、思辨的要素の少からず存するを認むべし。翁の一元論的説話を見るに宇宙開闢説に於ては太極一元説を採り、善惡、吉凶、禍福、好惡等の相對的存在を認めて絕對的には一圓なるを論じたり。又翁は語錄第五卷中に萬理歸二元云々云ひ、三才報德金毛錄中の太極之解、一元論之論圖、一元體之圖及び萬物一圓鏡には最も明快に其一元論を詳述せり。更に翁はまた太極と一元とは只位の去就による同體異稱にすぎずとなし、陰陽、清濁、五行、方名、天地、晝夜、混沌、有無、生死は名にして、その名を去れば、太極に歸し、一元に歸するものなりと論ぜり。但し太極の外に周子の所謂無極を採りしは、その一元論に疑惑を生ずる所なり、然れども翁は一體三行錄中に於て巧妙卑近なる比喻を以て無極と太極との同一物なるを解説して、一元論者なることは爲めに毫も傷けられざるが如く思はる云々。

西都原古墳調査談

今西助教

第二號 叢報 讀史會

西都原は日向國の中央に當る一ノ瀬川の平野に接する高臺地にして附近に國分寺遺蹟あり。此臺地に多數大小の古墳群集せり。宮崎縣にては此地に遺蹟調査所を設立し帝國大學の研究所として提供せるを以て我が大學よりは毎年教官學生出張して研究すること既に三年にして三回を経たり。此地の古墳には前方後圓、圓、方各種の形式のものあり。特に前方後圓の形式あるも前方部著しく低平にして此部木だ發達せざるか或は退化せるかにて一見直に前方後圓形と圓形の間にあるもの、如く感ぜしむるものあり、此地方にては此形のもの調査せしが其前方部よりは遺物を發見せず。後圓部よりは推石の下に粘土礫ありて、内部より神人龍虎鏡一、瑯玕曲玉二、細管玉、小玉多數、鐵刀子、鐵劍各一を發見せり。通常の前方後圓墳の此部には遺物の存在するものなるに此部の低平なる此墳には何等發見するものなきは、此部が實際上の必要なに至れるものならずやと思はしめたり。而して其後圓部の内部の構造を見るに、棺槨の上部を推石を以て蔽ふことは進入で、圓塚に見る如き石臍を作りて棺槨を收むるに至るものなりと想像せられざるにあらず。然りと云へども從來調査せし諸墳の間に種々の疑問起りて、未だ定見なし。尙ほ棺槨を推石を以て蔽ふことは新羅古代の墳墓に類似するものなること注意すべし云々。

古文書の裁判鑑定について

三浦教授

第一卷 一八三 (三七二)

古文書の研究が訴訟物件として提出せられたる文書の裁判鑑定に基くは東西の一致するところにして、西洋にてはこれより古文書學の發達を見たるも、東洋諸國に於ける鑑定は専ら古人の筆蹟の斷實に用ゐらるゝことなれり。日本に於ても從來裁判所の鑑定人として指名せられしは此種の古筆鑑定家に限られ、民刑事を問はず、裁判官の心證に甚深なる影響を及ぼす文書の鑑定が何等科學的根柢なき獨斷的のものたるは、深く遺憾とする處なりしに、近時漸く専門學者に鑑定を托せんとするの傾向を生ぜるは慶すべしとて裁判鑑定の方法を説明し、鑑定物件の撰擇については尙ほ改善の餘地あることを論ぜられ、最後に其實例として近く大阪府下に起れる某舊家の本分家の鑑定について兩家家傳の由來を其系圖古文書過去帳其他の記録に徴し、數種の系圖の書風記事の異同より其製作年代を考定し、古文書の偽造後世の書入れ等を一々指摘立證して斷定を下されたり。

例會 二月廿三日午後六時より學生集會場に於て開催、三浦、喜田兩博士、西田、清原、魚澄、中村の諸學士、粟野、今村、松野吉田、下川、辰馬、牧等の諸氏出席左の講演あり。

粟津供御人に就て

文學士 中村直勝君

室町季世に於て庶民間に禁裡御料所、禁裡供御人の名を得て、諸課役の免除、特殊物品の專賣權を獲得せんと企つるもの生じた

り、粟津供御人の如き其一例なり。粟津供奉人々朝廷との關係を見んまらば先づ魚公事よりせざるべからず、魚公事はも室町幕府の支配に屬せしが永享八年五月以來、伏見宮御領となれり。初め魚公事就中生魚公事は淀島羽方面の魚市代官に支配されしが如きも享祿の頃より粟津橋本の供御人は「魚座」の權を得、彼等は一方に於て日吉神人となり、他方に於て禁裡供御人又は内侍所供御人の名の下に諸公事免除、生煎商賣獨占權を獲たりしが、名を粟津庄に假る奸民多くして課役を免れん事を企つる者多かりしを以て天文十四年の始め頃、時の關白鷹司忠冬、内藏頭山科言繼との間に、粟津庄の事に關して爭論あり。結局、山科家の勝利に歸したるが、此時、山科家より第一の證左として提出せる正和五年藏人所置文と言へるものを、近頃江州膳所俊神社町藏文書中より發見せるも、明かに當時のものにあらず、其字體及び内容よりするも、此際の謄書なるべし。しかも、これを以つて成功せし粟津住人は、更に鹽魚公事、雜喉公事をも其手に納め、遂に凡て魚類專賣權を占め、粟津座の範圍は江洲滋賀村の湖畔より大津、膳所、瀬田、石山、南郷以南に及び、更に對岸なる栗太郎大蓋にも擴がりし事、國史研究室所藏の出納文書等によりて明らかなり云々。

中世の旅宿の發達、特に御師宿坊 粟野秀穂君

御師は必ずしも伊勢神宮にのみ限られしに非ずして、春日にも熊野にも存在せしが、本日は十月の例會に引續きて主として熊野の御師を述べし。

熊野三山の御師職には一定の宿泊範圍ありて他の御師の壇那を引入る事を禁ぜしが如く、この紛争に關する文書の遺れるものあり。即諸國よりの參詣人は必ず一定の御師職の家に宿泊せざるべからざりき、此慣例の起源は、思ふに祈禱等の事に由るなるべく特に崇敬せし人の家には其子孫及び其地方の人々までも依頼せしなるべし。高野山に於ける宿坊の如きも國々によりて一定の寺院に宿泊すべき規定あり、其由來の一例さも言ふべきは關東地方にありし葛西氏は五大院葛西坊の壇那にして其領内の人々も亦即葛西坊に宿泊する事となり。これ思ふに葛西坊第三十六世祐眞は伊達政宗の非常なる信仰を得たる人なれば、伊達家と親戚なる葛西もこの壇那となりしものか、盡し熊野に於ても亦同様の事情あるべし。高野山の宿坊の事の最も古き所見は千葉胤直が正長元年八月、蓮華三昧院に宿りしものなり。又京都圓山公園内の料亭左阿彌、也阿彌がもと寺院なりし事は注意すべく、東本願寺派の「詩所」の如き亦寺院と旅宿との關係上見逃すべからざる問題なるべし云々。

各講演終る毎にそれに對する批評、質問續出し、各自の意見を以

換して散會せしは十時廿分なりき。

支那學會

例會 一月廿一日午後六時文科大學第九教室に開く。來會者桑原内藤、高瀬、喜田の諸博士、羽田、今西以下の諸學士在學生等凡そ五十餘人。哲學科學生佐々木惠音君は「所謂管子の道」と題し一場の研究發表あり、先づ管子の本文批評より始め、次に管子の所謂道の意義に就て凡そ七ヶ條の特性を摘出して論述せり。

次に内藤博士は「九州旅行談」と題して昨年末より年頭にかけて宮崎縣西都原京都大學考古學研究所に、出張せられたる旅行談あり。豊後に於ける帆足文庫の現状、萬里の學統、學風、其名著として窮理通、入學新論の兩書、經學に關するものとして逸書辨釋、逸詩辨釋、左傳評釋等、文學の書として修辭通あり。尙帆足文庫には其の門人、米良東嶠、元田百平、勝田季鳳、野本武藏等の遺稿存す、次に梅園文庫の現状、梅園の學統、學風、梅園の名著、支語、贅語の批評もせらる。宮崎神宮徵古館内にて鴻爪詩集の著者落合燮石氏の經學の草稿を探り得、論語統、孟子輔義、周易統を見る。去つて山口長府に碩儒近藤清石氏を訪へば物故の後數日なりき。同氏は長州の碩學にして防長人物志、大内氏實錄、正閩史料、山口縣風土志等の著あり。當日陳列品の主なるものは入學新論假名考、帆足先生文集、醫學啓蒙、修辭通、三教大意、原教附錄

窮理通、西隣先生餘錄、寓意、梅のかほり、贅語、支語、梅園全集、梅園詩集、條理餘潭、鴻爪詩集、近藤清石履歷考、大内氏實錄等あり。

例會 二月廿六日午後六時より文科第九教室に開く、狩野、内藤高瀨の諸博士、其外凡そ三十八人、今、西學士は「西都原古墳調査談」を以て出張調査せられたる事を述べ、日本に於ける遺物遺蹟を先住民のもの、日本人のものに分てば宮崎縣にては兩者を併有す。就中西都原には大和の山陵にも比較し得べき程の大なるものありて甚だ豊富なりとて、前後二三回の調査談を詳密且つ學術的に論述せられ、其の一つは新羅の古墳に似たりとて比較論證せられ墳墓形式の發達に關して一個の見解を示されたり。次に本田學士は「魯の學派に就て」と題し先づ齊魯學の名稱より説き起し、論孟二書を以て六藝の館鑿とすべきこと、論語に齊魯古の三種ありて魯論は其の尤も權威あるものなることを例に依つて説明し、之に由りて六藝を批判するときは易の孔子の作にあらざること、孔子詩書を制定せし證據の無きこと、詩書禮樂は孔子の資つて以て教課せしこと、易春秋は七十子の後學の徒之を詩書に配して教課せしこと等を證を擧げ例を引きて説明し、進んで論語、詩春秋の三者は最も魯學派の特色を見るに足ることを論じ、魯詩と毛詩との異同を述べ、春秋は穀梁を魯學とし公羊、左氏と比較し

て穀梁尤も樸古、公羊、左氏、皆其後にあることを舉證し、最後に唐以後、特に宋儒及び日本の一派學者も魯學の影響を受けし痕跡あることを述べて結ばれたり、時に午後十時。

西洋史讀書會

例會 二月二日午後六時半より學生集會場に於て開く、原、坂口兩教授初め卒業生學生十餘名來會せり、席上左の紹介ありたり。

獨逸文學に於ける帝國主義の發展 宮崎 市郎君

本論文は昨年十月號の「十九世紀及其後」誌上に掲載せられしものにして其要旨左の如し。

今次の大戦開かるゝや、獨逸兪負の人は之を以て獨逸國民の少數者のみ其の責任を負ふべきものなりと辯護せしが其後の經驗は其の誤れること證示せり。獨逸國民は宣戰布告あるや直に同意出征する準備完成し居りしなり。此國民的準備を尋ねれば、英人は直にトライチケ、ニイチエ、ベルンハルチを數へんも、彼等は偶英人の注意に上りし少數者にして、獨逸に於ける帝國主義傳説は既に一世紀以上も前より其文學中に高調せられ居りしなり。其歴史の起源は實に十八世紀に存すること明かなるも、十九世紀前半に至り特に著しき發達をなしたるを以て、こゝに一紀元を劃せしものと觀るべし。スタインが獨逸の歴史家を糾合して史學協會を立つるや、其史家の中には彼のプロシヤ中心政策を賛成するもの多

かりき。又獨逸史學の三長老たるニープール、モムゼン、ランゲは此傳説の發達に貢獻するところ大なりき、モムゼンの影響は間接なるも、其の羅馬史より演繹して苟くも力と運命とを自覺せる國民は斷乎とじて其使命を行ふを要すと説き、ニープールは羅馬史の教訓を力説すること前者よりも大膽なりき。彼は伊太利及佛蘭西國民を輕蔑し、古羅馬共和國の嚴格と生氣とを有せる普魯西を賞讃し、周圍の小邦を之に合併すべき事を説けり。ランゲも亦千八百四十八年の革命以來從來の民主思想を離れ普魯西の帝國主義及其積極政策の熱心なる支持者となり、必要ならば武力に訴へても其の周圍の小邦を糾合し奧太利と共に之を支配すべきを説けるのみならず、或時には急進主義の巢窟たる瑞西を併合して平和の危險を根絶すべしと勸告してビスマルクを驚かしたることあり彼は獨逸文化の保護の爲には普魯西の膨脹はやむを得ずと信ぜしなり。此等の外トライチケが有名となる以前に帝國主義の發達に力ありし歴史家頗る多し、ギーゼブレヒト、メンツェル、ヘルツ等は其著述、雜誌、詩を以て國民を動かすこと小ならず、又帝國主義の爲にゲツチンゲン大學を逐はれたるダールマンは最有方に獨逸の統一と普魯西の覇權とを説ける一人にして、後年のトライチケの思想は其師たる彼に得るもの大なりき。又ドロイゼンは其著アレキサンデル大王傳に於いてギリシヤの小邦を統一したるマ

ケドニヤはやがて普魯西の運命たるべき事に論及せり。其他史家にはホイツセル、シューベル、シュミット、言語學者グリム兄弟、ベエク等は各其學ぶ所を以て小邦の合併、統一、普魯西の覇權の合理的にして且つ必要なるを説き、詩人カイベル、小説家フライタハ等何れも此思想の傳播に努め其の影響する所甚だ大なるものありき。帝國成立の後には此氣勢の緩和を免れざりしが、之と後年勃興せる帝國主義との間に在りて此傳説の力説に努めたる大立物はトライチケなりき。されど彼の出現にも拘らず其の氣勢の弛みたる事は掩ふべからず。然るに急激なる人口の増加、産業の發達及びローマンチックなる皇帝の即位は此傳説を復活して更に猛烈に燃え上がらしむるに至れり。皇帝のギムナジウム改革の教育演説及び海軍擴張問題は實に其の導火線なりき。千九百年其擴張案の議會に出るや有名なる學者の一面は海軍問題講演自由同盟を作りて海軍擴張の必要を力説し講演の重なるものは二卷として出版せり、講演者にはシュモラー、ランブレヒト、エーレンベルヒ、ゼーリング、フランケ、ツクナー等當代の碩學を網羅せり。此の事業は此種運動の模範となりて之に倣ふもの續出し、全獨逸同盟、海軍同盟、全獨逸學校同盟、殖民協會等は何れも全國各地に多數の會員を有し其機關として新聞雜誌講演者配布用小著を有し競うて帝國主義の傳播に努め、遂に其の最も極端なるもの程歡迎さる

の有様なりき。露艦隊の全滅、モロッコ問題の失敗は此傾向を益險惡ならしめ、ベルンハルチの著述も此の間に出版せられたりき。クラム教授は當時獨逸に於て來るべき戰爭に關する著述は一年凡七百餘種出版せられしことをいへり。偶之を警戒する識者ありしも國民は之に耳を傾けず、嘗に軍人のみならず國民の總ての階級の多數が只開戦の日を待つに至り遂に今次の開戦となり。

吾人は能く獨逸國民の熱狂の由來を考へ、非常なる決心を以て其の自負迷家を打破するに努めずんば永く歐洲恐怖の種子を残す、こゝならん。

例會 二月二十三日午後七時より大學本部小會議室にて開會、左の紹介ありたり。

國民精神と歴史

竹林 熊彦君

アメリカ歴史評論一月號の卷頭に載せられたる論文にして、昨年十二月廿八日華盛頓にて開かれたる米國史學協會年會の議長たりし加州大學歴史教授ステフェンス氏の講演にかゝるもの也、其の要領に曰く、總ての時代は其の時代の解釋に従ふて過去の歴史を書く、歴史家は時代精神の支配より免がる能はず不知不識其の教育或は境遇によつて一方に偏するもの也。されば歴史家の著作は彼自身の解釋と同時に時代思潮を示すを以て、歴史家の個性と其の時代思潮を知るは極めて必要の事也。而して基督教は中世の知

識の根本的基礎となり、文藝復興時代にては懷疑派すら希臘羅馬の假説を採用し、宗教改革時代の論争者は特別な信仰の光を以て過去を解釋せり、更に政治史家は政治學説を以て過去の出來事を叙述する註疏せり。國民精神の信仰は十九世紀根本の信條とせる事尙ほ中世紀の基督教の如し。而して過去の歴史家が宗教的或は政治的熱情を作為したるが如く十九世紀に於ける歴史家は國民と國民との敵對心を起すに至りたる國民的狂熱の作為に對し其の責を分たざるべからず。然れども歴史家は單に其の時代精神を正眞に述べたるに過ぎず。中世の後半にては國民なる言葉は大學組織に用ひられ、ルーテルは西歐羅巴文明の統一なる意味に使用せり、十八世紀にてはゲーテが國民の上に入道ありといひし如く一般には國民的精神に冷淡なり。佛蘭西革命は茲に變化を齎したるが、ナポレオンは寧ろコスモポリタンの思想家なりき、維納會議も國民主義には同情を有せざりき。ナポレオンの露國遠征は露西亞國民精神の發露となり獨逸の國民的愛國心を刺戟せり。而して一旦平和の克復と共に歴史的研究は始まり國民主義者の主張は其の影響を及ぼすに至れり。スタインは一八一九年に古代獨逸史研究會を設立し一八二六年には Monumenta Germaniae Historica の第一卷公にせり。一八三五—五三年に公にせられたるアンローマルタンの佛國史は佛蘭西人の國民的一致を説きたり其他にチエ

ール、ミシエレー、キソー等あり。この國民精神が近世獨逸帝國を造るに至りしものにしてビスマークは新獨逸帝國がプロシヤの下に形成せられたる功蹟はプロシヤ軍隊に次では獨逸歴史教授の功多しと言へり。ダールマンよりドロイゼン、ツイベルよりトライチケに至る有名なる獨逸の歴史家は獨逸民族の歴史的统一を説きて獨逸聯合運動の先驅となりし也。英國のグリーン、西班牙のラフエンテ、米國にてはスクラー、マックマスタ、ホルチユガルの史家アラウジョウの如き孰れもこの傾向を示し居り、又かのパラスキーのボヘミア史ゼノホルルのルーマニア史もこの精神を代表せり。而して斯の如き國民的史家は國家的偏狹心を養ひ、其結果怖るべき今回の歐洲大亂を生ぜり。吾人は國民主義を以て單に歴史記述の一階段とし、二十世紀の史家はゲーテの國民の上に入道ありといふ句を記憶して各國民が世界文明に貢獻する所あるべきを望むと。

例會 三月八日午後六時半より學生集會場に於て開會、左の紹介あり。

余のトライチケに對する追憶 (ウイリアム、ハーバット、ドーン)
「十九世紀及其後誌上掲載」

圓谷 弘君

Dawson 氏はトライチケの生前親しく其風貌に接し其講義を聴けり

る人にして故き思ひ出を辿りつゝ、この大史家が眞面目を描出して、公正なる論評を加へたる、この一篇は蓋しトライチケを知るに恰好のものなるべし。氏は先づ近時俄にトライチケの名が喧傳せらるゝに至りし所以は、彼の政治論と現時局との關係が密接なるに由れりとし、それより、彼とニイチエミを對し、彼の風容に説き及んで、彼がその肉體に於ても決して凡人ならで傑出せる強者のタイプを具へ居りしを説べたり。次に彼の經歷に及びその理想學問を論じ、彼をランケと比較し、後者の純史學的態度に對して、前者が主觀的理想的なりしを説き、その政治論と史學とを結合せしめし所に、彼が大學教授としての特筆すべき事業は存するなりとし、彼が權力の教理、國家至上主義、史家として獨逸帝國を歐洲史上に、プロシヤを獨逸史上に顯揚せしめし功績を挙げ、而もこの主義態度は彼をして偏見に陥らしめ、獨逸及普を中心とする彼の觀察は史家としての彼の價値を減削せしめたるを認めたり。これより氏は大學講壇に於けるトライチケが講義の實際を語り、その講演は常に客觀的冷靜なるを得ざりしを説き、獨逸を解せざる外國を痛罵し愛國の熱情を迸しめし實例を示し殊に英國に對する態度が初めは友誼的なりしもの、次第に敵對主義となり遂に排英心は最後迄増長し行けりと言へたり。次に彼が熱烈なる雄辯の比喩なかりしを稱し、當時の光景を回想して實例によりその

講義振りその公開講演の人氣、獨逸青年を奮起せしめたる影響の偉大なりしを説き、最後に英人が彼の英國非難を以て一概に無稽の說として排し去るは失當の見さいふべく、彼が評言の裏には確かに吾人が省察すべき一面の眞理存せるなりと論結せり。

地理學研究會

例會 十二月一日下田禮佐君のリヒトホーヘンに就きての報告あり。先づ氏の生涯を三期に割し第一、幼年及修養時代に於ては學歴より、獨逸國內アルプス等の踏査と其結果とを述べ、第二、旅行時代に於ては、一八五九年全權大使秘書官として支那に來り、印度暹羅等を踏査し、又日本に來遊して、九州島の論文を発表したり、かくて桑港に至りて、合衆國の研究に従ひたるが、カリフォルニア全産地の研究の結果旅費を得て再び支那に來つて、此に氏の支那内地旅行となりたる事、第三、大成時代に於ては支那の研究を始めとして一九〇五年逝去まで各方面に亘りて、地學上に貢獻したり云々。

例會 十二月十日座田達二君の英國倫敦地學協會の起源及其發達に就きて、其協會雜誌等に記載せられたる所によりて説明あり。
例會 一月廿五日伏見義夫君の英國なるスコッチッシュ地學雜誌所載瑞西「共和國及チユチブ州」と題する論文の紹介あり。先づ瑞西概説を試み、チユチブ州の氣候は健康的なれど、チユチブ

市は不健康地なれば、人口減少すれども、古來各國よりの移入民多きを以て、統計上増加を示し、近時は市區改善の結果健康地となりたるを述べ、此等各國の移入民は、地理上の影響に依りて團結する事より、住民の特質を列舉し、又本州より古來各方面の名士の輩出せる事、及宗教教育を説き、州民團結の理由を以て結べり。

宇治行 一月卅日内田田中兩學士石山より岩間寺を経て宇治への道路を視察せり。

例會 二月三日座田圭三君のフンボルトに就きての報告あり、フランクフルト大學にて財政學を學びしが、驟然地理學に志してゲッチンゲン大學に移るや、ライン河流域の玄武岩に關する論文を公にし、其後蘭、白、佛等諸國を旅行して益々實地研究の必要を悟り、ウエルテルの門に入りて地質學を始め、氣象、天文等の諸學科を修め、かくて佛の植物學者ボンブランと埃及旅行を企て、西班牙に至り、其目的を變更して西領亞米利加の旅行を成し、之に依りて學界に貢獻したる所を擧げ、轉じて亞細亞旅行と其結果とを述べ、氏の哲學を附言せり。

小川教授は、フンボルトの南米チンボラソ登山の事、氏が初めより政治的活動をなしたる事及其事情等につきて追加談を試みたり。

談話會 二月八日近江蒲生郡誌編纂主任中川泉三氏の來學を機と

し、午後六時より學生集會所に開催す、小川、内藤兩教授、喜田博士、中川氏、田中、那波、内田諸學士の外學生等會衆二十餘名、中川氏は「南江州の禿山」の成因に就きて、此地方は古代より各地に製陶業行はれたる爲め、其燃料として伎木せし事が眞因にして、建築用材として採伐したるによるこの從來の意見を否認せられ、小川博士は更に陶土採取も其一因たるべしと附加せらる。

次に梅原末治君は、福井縣敦賀郡なる西海岸地方松原村等二村八區にて視察したる産小屋、月小屋の形式、設備、使用の状態より此風習の意義等について精細に興味深く説明あり。

喜田博士は、江州日野附近小野なる鬼室集斯の墓と稱するものに就きて、從來の調査を批判して、其誤謬を指摘し、而も誤謬の依つて出でたる經過を察し、以て此墓を否定せられたり。又内藤博士は墓標の千支の配置のみによりても否定の證左充分なりと述べらる。

喜田博士の八瀬大原の民族觀について、内藤喜田兩博士の討論は此日會員の最も興味を感じたる所にして、小川博士等も亦意見を發表せられたり。かくて内藤博士は此問題より日向を始め九州古墳調査の事に話頭を向け、日本考古學界の研究法を難じ、博士の研究方針の一端をも陳ぜらる、等、午後十時閉會に至るまで談

論甚だ旺んなりき。

飛騨史談會概況

飛騨史談會は押上森藏、岡利平、住齋造三氏等の主唱により、飛騨に關する史料の蒐集、歴史及地理の研究を目的として大正三年五月創立せられたるものなり。會の事業は毎月機關雜誌飛騨史壇の發行を始めとして、屢々講演會を開き、史料展覽會をも催し進んでは史跡保存の方法をも講ぜり。今其近況を記せば、大正四年五月には高山公會堂に於て、同六月には國府村西念寺に於て同十月には萩原小學校に於て、各講演會を開き、又同八月の大講演會には三上文學博士、渡邊文學士を聘し、同時に高山町に於て飛騨史料の展覽會を催せり。本會はまた臨機圖書の出版に従ひ、さきに「田中大秀翁」を發行し、又近く飛騨國史の編纂を計畫し居れり。(飛騨史談會報)

柳河史談會概況

柳河史談會は舊柳河領内の史蹟を調査顯彰し、兼て汎く歴史及參考史料を研究するを目的として、明治四十四年八月二十日創立せられたるものにして、會費の大部分は立花伯爵家の補助によりて支辨し居れり。本會幹事には渡邊、岡、戸次の三氏創立當時よりこれに當り、今日に至るまで専ら會務を執掌しつゝあり。

出版の計畫あり。(會員岡茂政氏報)

加能越史談會概況

本會は毎月一回例會を開くの外尙各種の事業を行へり。今其近況を擧ぐれば下の如し。明治四十四年十月會員一同女山神籠石を視察して、これを撮影し、當時演習中の久留米行在所に献納せり。同四十五年一月地方贈位者遺物展覽會を開き、五條文書、舜水、張斐、岩倉、横井等の手蹟を陳列し、同時に柳河高等女學校に於て由比賀氏は五條家、渡邊村男氏は安東省庵、岡茂政氏は立花親雄氏に關する講演をなせり。大正元年十二月八日本會主催の下に第一回福岡縣下聯合史談會を柳河に開き、久留米、八女、柳河の各史談會より出品の古文書、古器物五百餘點の陳列をなし、同日午前には城内小學校にて渡邊村男氏の耶馬臺、伊東(尾四郎)學士の立花家文書につきて、中山(平次郎)博士の元寇概況に關しての講演あり、午後には柳河舊藩主立花伯爵邸にて同家珍藏の古文書を陳列し、岡、樺島氏等同家關係者よりこれが解説をなせり。大正三年九月時局講演會を中學傳習館に開き、秋元砲兵大佐、井手海軍大佐、加藤傳習館長講演をなし、更らに同年十月第二回時局講演會を開き、同校にて吉原代議士青島視察談をなせり。同年十二月史料繪葉書三組九葉を發行せり。尙本年には尊祖立花宗茂公贈位を機とし、其事蹟顯彰の目的を以て講演會及遺物の陳列を行ひ、又安東省庵の心喪集語、牧園第山の行在成間等の藩儒の遺著

加能越史談會は三州の史料を蒐集調査し、且史蹟の保存を圖るを以て目的とし、大正四年七月四日創設せられたるものなり。現在會員約五十名、假事務所を金澤市下傳馬町七十番地に置き、和田文次郎氏外二氏を幹事とす。その近況下の如し。

大正四年九月十二日兼六公園保勝意見を定めんが爲め、會員相互に園内を巡覽し、別に卯辰山慈雲寺に趨きて、富田景周の墓碑を弔し、同氏所藏に係る翁の遺墨、著書を展覽したり。同年十一月二日幹事は兼六公園保勝に關して縣廳に知事を訪問し、陳情の上建議書を提出せり。同年十一月二十一日蛤坂妙慶寺に於て、加越二州贈位諸氏慶讚會を修し、舊富山藩主贈從三位前田利幹郷、贈正五位安達幸之助、贈從五位關口開、同清水誠、同加藤謙二郎諸士の法要を營み、武藤元信氏の安達幸之助氏に關する追懷談ありたり。大正五年一月十六日武藤元信氏の「能登傳從について」を題する前田利政傳の研究發表あり、別に瑞龍公世家を讀みての實義ありたり。(會員牧野信之助氏報)

池田史談會概況

前回到報告せし後、例會を開くこと三回、郷土史料展覽會暨を開催

はしこ一回、遠足一、別に郷土史料繪はがき第一輯を發行せり
今例會の講演題目を梗概を左に記さん。

一、朝鮮の古墳及舊蹟に就て

山岡光太郎氏

一、近松箕林子の研究

安藤藤次郎氏

一、吳春論

稻東 猛氏

一、池田氏に就て

海老原末吉氏

一、城の研究(第一回)

岡部常次郎氏

二月七日池田師範學校に於て第三回郷土資料展覽會を開催す。同日大阪府史蹟調査會の主催にかゝる講演會を催し、左記の講演ありたり。

一、舊麻田藩主青木一重及元祿年間池田酒造米につきて

海老原末吉氏

一、豊島地方の古代

喜田 貞吉氏

尙當日陳列品の主なるもの、左の如し。

拓本之部 「大廣寺鐘銘」「田中桐江墓誌銘」「牡丹花宵栢碑」「望海亭碑」等二十點(史談會藏)

圖書之部 僧日初著「日本春秋寫本(吉田余三治郎藏)」、山川正

宣著「山陵考略」、僧日初著「翁媪緒餘」、宵栢著「春慶筆」(府

立圖書館藏)、懸林著「耶山集」、「佛日懸林禪師語錄」二端(山和

尙紀年錄(佛日寺藏)、池田中古圓(元祿年間)(河村鼎藏)、元

祿年未酒造米高帳(攝泉和三州)(稻東步馬太郎藏)等四十點間、
文書書畫之部 「大塔宮令旨」「武家方制狀(箕面瀧安寺藏)」、「青

木一重文書(視庄六藏)、「青木一重自畫像(中村政治藏)」、「

青木一重稅則(板垣武治藏)」、「萱野三平、嬭餘賦」「三平傳序」

(萱野重道藏)、「牡丹花懷紙(西田常太郎藏)」、「吳春池田寛

中所畫三羅漢圖(稻東步馬太郎藏)等五十點

遺物之部 「牡丹花宵栢木像(大廣寺藏)」、漢鏡三面、古墳發掘

品等二十二點

三月七日會員一同三島郡豊川村應頂山勝尾寺に赴き、古文書の研
究を爲せり。(幹事岡部常次郎氏報)

朝鮮古書刊行會

朝鮮京城に在る朝鮮雜誌社主幹釋尾春栢氏の經營せる朝鮮古書刊
行會は、明治四十二年十月の創設にして、朝鮮古書の刊行を目的
とし創設以來其期日を違へず毎月數百頁の書一冊宛を刊行し、二
年を以て一期として、既に第三期の刊行を了し總計七十二冊を刊
行し、更に第四期に入り三冊を刊行せり。是等の刊行物の校正に
は尙ほ遺憾の點なしとせざれども、亦經營上止むを止ざる事情あ
るを諒せざるべからず。古來朝鮮にては書籍は藏すべきものとし
て讀むべきものとはなきヨリき。其書冊の好大なるは實に之が爲
なり文集等は多く刊行せられしも、之を少數關係者内に配本する

か或は特別の需要者が其冊板に就て自用のものを印本するに止まり、書籍店の如きは、李朝後期に至り紙塵に於て四書通鑑節要の類を印本して賣りしのみにて、書籍賣買の途なかりしを以て、刊行本と雖之を得るに難く、一般に書冊の數少かりしを、以て現今遺存するもの極めて少く、之を購求することに容易ならず。矧して大部の編纂物の如きは、大抵寫本を以て傳りしが故に、之を見ることがすら困難なりき。而して此等書籍が社會急激の變遷に煽られ、月に日に湮滅せんとする傾向を見し吾人は、其保護の必要を痛切に感じたりしが、本會の事業起りてより、大東野乘、東國輿地勝覽、燃藜室記述、東文選の類の容易に且つ廉價を以て吾人の手に入るに至りしは其學界を裨益せる功多大なりと云ふべく、一方より見れば朝鮮文献の保護をなせるものと云ふべし。需要者稀少なる朝鮮古書を數年に亘りて尙まず挽まず刊行せるに對して吾人は刊行會の經營者に向つて滿腔の敬意を表し、併せて今後其事業の益隆盛ならんことを切に祈るものなり。既刊書籍の主要なるもの次の如し。

第一期分、大東野乘十三冊 龍飛御天歌一冊 海東釋史四冊

外十數種六冊

第二期分、東國通鑑三冊 燃藜室記述九冊 東國輿地勝覽五冊

李相國集二冊 外五種五冊

第三期分、海行總載四冊 東文選七冊 星湖僂說類選二冊 芝峯類說二冊 外四種七冊

第四期には、文集類を刊行し、現今李退溪集を刊行しつつあり是等の書は會員豫約の方法を以て少數の會員に配本せしものなるも、目下尙ほ少數の殘本あるを以て分冊發賣の希望に應ずといふ(一冊三圓乃至三圓五十錢發賣所朝鮮京城旭町二丁目朝鮮雜誌社)

光 文 會

朝鮮古書刊行會に對して朝鮮人經營の光文會ありて同じく朝鮮古書の刊行を目的とし崔南善氏其主幹となり數年前より其事業に盡瘁せり。既に東國通鑑海東釋史熱河日記東京雜記(權以慎刊誤附)外十數種を刊行し、燃藜室記述大東韻玉尙ほ刊行中のものあり。校正比較的好良にして價格も亦低廉なり。刊行の期日は一定せず雖崔氏は熱心に眞面目に其經營に盡しつゝあるもの、如し其存在の未だ廣く學界に認められざるは惜むべし。吾人は此會の事業の健全に發達せんことを祈るものなり。刊行物發賣所朝鮮京城南部上窰洞新文館)

歐 米 史 界

近著 Amer. Hist. Rev. は歴史教育上の好著 Henry Johnson 氏の Teaching of History in Elementary and Secondary Schools

(New York, 1915) を紹介し居り。吾人は先に此種の名著として Jomme 氏の *The Teaching of History and Civics in the Elementary and the Secondary School*. (1902) を推せしが、今や更に最近教育上の顯著なる進歩に促されて本書の如き優秀なる著作を觀るに至りしが如し。Amer. Hist. Rev. には兩著の内容目次の大體が比較せられ居り、未だ Johnson 氏の著述に接せざる吾人にも、これを Bonne 氏の著と對照して、略其の内容性質を合點し得らるゝなり。而して歴史の意義研究法、歴史教育の目的價值、歴史課程等に關する章句孰れも簡明直截にして而も創見に富み興趣深く、歐洲に於ける歴史教育の發達を述べたる數章の如きは其精細なる他に比儔なからべく、殊に實際上の歴史教育法を説ける所は、盡く著者が實驗より來れる論證にして、極めて有益なるものゝ由なり。

Lucas 氏の *Historical Geography of the British Colonies*. 第四卷の二、表題の *Colonies and Dominions* を改め、*History to the Union of South Africa* の題名にて公にせられたり。本書は一八九五年の Jameson Raid 以後の南部アフリカ史を取扱へるものにして一九一〇年に至る十五年間の詳細なる歴史的記述を試みられたり。附録に重要な文書を附し、且つ數葉の地圖を添へたり。著者の最も力を注ぎしは一八九九—一九〇二年の戦

史にして、各地の戦鬪に就いての記事詳密を極め居れり。これに對して、平和克復後に於ける南部アフリカ統合の事情や、白人對土人の重要問題に關する叙説の割合に簡略に過ぐるは遺憾なり。然しながら兎に角アフリカ植民史研究者にミリては甚だ有益なる新著なるべし。

尙最近の出版物として注目すべきもの Dr. A. J. Carlyle の *A History of Medieval Political Theory in the West*. の第三卷 *Oxford Studies in Social and Legal History* の最近の卷 (Levet & Pallaver's "Some Effects of the Black Death," Lemard's "Rural Northamptonshire") の二論文を取らば) Spenser Wilkinson の *The French Army before Napoleon*. (Oxford University Press) Cross の *The Sources and Literature of English History*. の改訂新版 *The Military Historian and Economist*. なる *New Quarterly* の創刊等あり。

獨逸史家の近狀は、これを詳かにせざれば、柏林大學に於ける史學の雄將 Hierich Schiller 教授は昨年七十の誕辰に際し、門下生によりて「中世と近世」と題する紀念論文集編纂公刊せられし由吾人は教授が老いて益々壯ならんことを祈らざるを得ず。これと共に吾人はワイプテッロ大學教會史教授 Theodor Bräuer の訃報に接せり。氏は昨年六月八日享年七十三を以つて逝去す。教授は

Zeitschrift für Kirchengeschichte. の主幹として、將た多くの歴史の論著を以て、史界に貢獻する所尠少なからざりしに惜むこと。

歐米に於ける時局に關する出版は益々盛んにして所謂戦役關係書目は日に増大されつゝあり。而も其多數は際物たるを免れずれども、今日に於ては開戦當初に比し確實なる資料に據り着實なる研究に成りし著述次第に現はれ來れるが如し。此種出版物に就いての報道を感ぜらるる Amer. Hist. Rev. は其一月號に於て亦最新の著書を紹介し居れり。其中の一班を擧ぐれば、一般戦記として J. H. Dennis, the Campaign of 1914 in France and Belgium (New York); H. Jellicoe, A General Sketch of the European War : the First Phase. (New York) C. H. Bacon, Der Völkerring. eine Chronik der Ereignisse seit dem 1. Juli 1914. (Stuttgart) 等あり、觀戰記としては米通信員たりし、Frederick Palmer 氏の My Year of the Great War. のタイトル通信員 George Adams 氏の Behind the Scenes at the Front. の題を佛人にしよば M. Dupont 氏の En Campaigne, 1914—1915, Impressions d'un Officier de Légère. の如きあり、獨逸國の役軍記として E. Wertheimer, Im Polnischen Winterfeldzug mit der Armee Mackensen ; P. Jandenberg, Gegen die Russen mit der Armee Hindenburg. 等東部戰線に關するものあり、白牛

關係の著述として白國陸軍會館内の編纂にからる La Campagne d'Armée Belge, 31 juillet 1914—1 janvier 1915, d'après les Documents Officiels (Paris) を戦前に柏林駐劄白國公使たりし Beyens 男の L'Allemagne avant la Guerre. les Causes et les Responsabilités (Paris). の如き有益にして且つ興味深きものなり。戦役に關する論議に於ては、英として A. Toynebee, Nationality and the War(London) ; J. McCabe, the Soul of Europe : a Character Study of the Militant Nations(London) ; F. Harrison, the German Peril. (London) 等を數々あげ、獨り於て A. Hefner, Englands Welt Herrschaft und der Krieg (Leipzig) ; Th. Mohl, Die Geheime Vorgeschichte des Weltkrieges(Leipzig) ; G. F. Steffen, Weltkrieg und Imperialismus : Sozialpsychologische Dokumente und Beobachtungen vom Weltkrieg, 1914—1915 (Jena). 等註田々の價値あるものなるべし。伊太利關係のものとして S. Barzilai, Dalla Triplice Alleanza al Conflitto Europeo (Rome) ; H. Walschinger, La Mission du Prince de Bulow a Rome, Decembre 1914—Mai 1915 (Paris) ; J. Desirée, En Italie avant la Guerre, 1914—1915 (Paris). の如き實著たるべし。土耳其及ペルシヤ方面に就ては獨逸誌として H. v. Bittow, Deutschland, Asienreich-Ungarn, und die Balkanstaaten (Man-

burg) Jäckh, Der Aufsteigende Himalmond : auf dem Weg zum Deutsch-Türkischen Brüdern (Stuttgart) の如きあり佛書 (J. Domergue, La Guerre en Orient, aux Dardanelles, et dans les Balkans (Paris) 等出てたり。先に巴里の Hachette より出版されし白耳義灰書(第二は其後英政府に於てもこれを英譯出版せし由。又佛陸軍省は最近 Recueil des Documents inseres au Bulletin Officiel et concernant spécialement la Periode des Hostilities du 2 Avril 1914 au 30 Juin 1915 を公にせり。

會報

晚餐會 二月九日午後六時より大學々生集會所に於いて晚餐會を開き、各評議員、委員、書記十九名出席したり。

例會 二月十九日午後一時より文科大學陳列館階上特別講義室に於いて例會を開く、「米價調節と御用金」と題して會員法學士本庄榮治郎君、「第十七世紀に於ける英佛同盟及び英國侵入計畫に就て」と題して會員文學士長壽吉君の講演ありたり。

編纂委員會 一月廿一日及び三月八日の二回文科大學陳列館内に於いて、史林第二號編纂會を開き、三浦、桑原兩評議員及び各委員出席したり。

續史的研究の發刊 本會の編纂に係る續史的研究一冊は二月十一

日附を以て東京富士房より發刊したり。

寄贈交換圖書

- 滿洲地理歴史研究報告 第一、第二 東京帝國大學文科大學
- 日本偉人言行資料有斐錄 全 國史研究會
- 國史叢書 大友公御家覺書 古郷物語 國史研究會
- 從道鑿五代記
- 史料通覽 中右記第五 日本史籍保存會
- 東洋學報 東洋協會
- 考古學雜誌 考古學會

會費領收報告

(振替貯金拂込のものに限る)

- 一金壹圓貳拾錢(大正五年分)
- 神 昌 河野 省三 押上 森藏
- 石濱 純太郎 田中 吉太郎 岡 茂政
- 山本 元 浦上 宗衛 岸本 繁造
- 奥 秀太郎 長谷川與三郎 渡邊 辰次郎
- 上原 精一郎 秋山 吉次郎 松野仁左衛門
- 柏原 昌三 河野 常吉 磯野 實惠
- 一金壹圓參拾六錢(大正五年分 十六錢預り)
- 一金六拾錢(大正五年上半期分)
- 上村 治 六一